

その1

岩室村の自然と風土

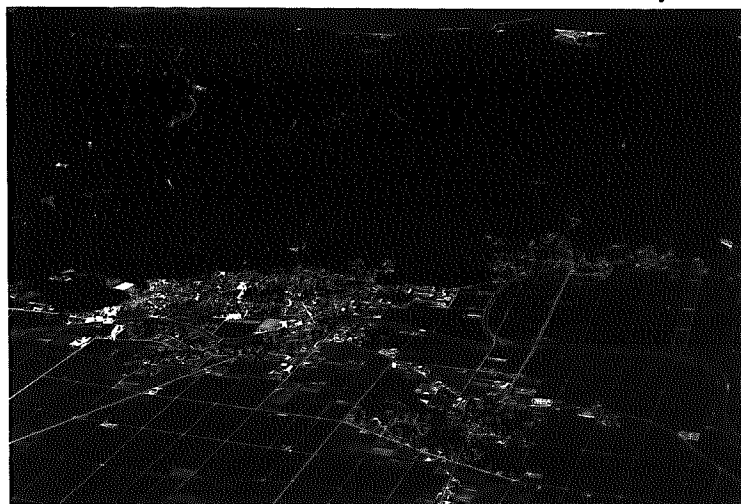
岩室村の地理的、歴史的特徴を探ってみる

■今月からこのコーナーでは、みなさんから「わがふるさと岩室」のすばらしさを再発見していただくため、村の歴史や自然、そして各地区の名所・旧跡などを織り交ぜながらシリーズでご紹介します。そこで第一回目今回は、村の自然と風土です。

いまから千五百万年ほど前、多宝山や弥彦、角田の山々と新潟平野の帯は、羽越地向斜と呼ばれる深い海でした。その海底には新潟油田の地層となった泥や砂が厚くもつていましたが、岩室付近の海底では、地層の間にマグマが流れ込んだり、海の中へ噴き出したりしていました。やがて造山運動と呼ばれる大地の運動が起こり、海底の地層はしわのように曲り、少しずつ上昇を始めました。マグマが冷えて固った岩を含んだ地層は、やがて折れ曲り、すべり落ちたりしながら盛り上がり、ついに山にまで成長しました。

この山の一部分が多宝山を中心とする岩室の山地なのです。多宝山が水面から姿を現わしたのは、千万年前の新第三紀鮮新世の頃だといわれています。

その当時の平野部はまだ海でした。平野部が陸地となって人間が生活できるようになったのは、二千〜三千年前（弥生時代）のことです。しかも、水害などからのがれ人々が安心して住めるようになったのは最近のことです。岩室村（総面積36.06km²）の地質は、その



多宝山を中心に、山野や海辺、そして人里にも豊富な自然と歴史が残る岩室村

地層ができた時代で三つのグループに分けられます。多宝山を中心とする山地は、新第三紀中新世の地層で、頁岩・流紋岩・玄武岩・凝灰岩・角礫岩からできています。

金池、石瀬、岩室、樋曾、間瀬峠、間瀬海岸南部の花立から獅ヶ鼻に至る磯山や多宝山山頂付近の山々は、主に流紋岩からできています。多宝山は、粗粒玄武岩と流紋岩質凝灰角礫岩や凝灰岩が交互に積みかさなった状態できており、所々に玄武岩の熔岩や玄武岩

質の凝灰角礫岩が分布しています。樋曾山の一部は黒色頁岩からできています。また、間瀬の本村より北の立岩までの地域は、玄武岩の熔岩、凝灰角礫岩そして流紋岩質の凝灰岩などが多く分布し、間瀬層と呼ばれています。

ところで、岩室村のシンボル多宝山を中心とする山地は、弥彦・角田の山なみの中で、最も貴重な自然を有し、東北から眺める多宝山は富士山のように見えます。そして、その山すそに広がる村々は、垂仁天皇の御代、山辺の大鷹が諸国の山野を巡り歩き、この地「和那美の水門」で白鳥を捕え、天皇に献上したという古代のロマンに彩られた歴史の古い村でもあります。

また岩室の自然は、景観の美しさを誇るばかりでなく、学術的・教育的な面から見ても貴重なものが沢山あります。玄武岩の熔岩が海中で固まってできた枕状熔岩は、全国的にも珍らしく、また、その岩塊に含まれている沸石という鉱物は種類が多く世界的に知られています。生物では、バシクルモンヤツボクサのように、南限と北限の植物が同一箇所で見生している珍しい地域でもあります。

この素晴らしい自然を、ただ遊興のためのみ利用するのではなく、自然の構造や機能について理解したり、自然と人間の関係について学ぶ生きた博物館として活用していただきたいと思えます。（このページで紹介した内容は、昭和51年に発行した「岩室の自然」教育ガイドブックから抜粋したものです）

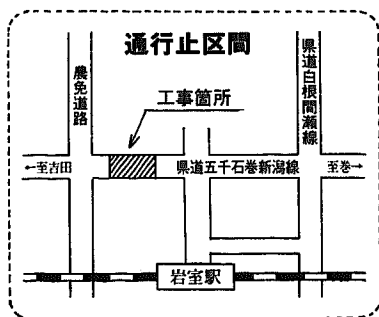
工事中

工事のため通行止となります。

十一月一日から三十日まで、県道五千石・巻・新潟線の和納一区地内（左図）で工事のため全面通行止となります。皆さんには大変ご迷惑をおかけしますが、ご協力をお願いします。なお、大型車の迂回路については、表示板に従ってください。

■工事期間

- 11月1日〜30日 全面通行止
- 12月1日以降は、午後5時から午前8時までの間、普通車のみ通行可能です。



—お詫びします—
 広報10月号(P13)のうぶごえ（出生）欄に、岩室の石崎文弥さんの氏名が欠落していましたこと、ここに深くお詫び申し上げます。